

Jones, M. D. and McBeth, M. K., 2010, "A Narrative Policy Framework: Clear Enough to be Wrong?" *Policy Studies Journal*, 38(2): 329-353.

ジョーンズ&マクベス, 2010, 「ナラティブ政策枠組み」

#### レジュメ作成者による紹介

公共政策分野において「実証主義」の立場からナラティブを研究するアプローチとして「ナラティブ政策枠組み (Narrative Policy Framework)」を提示した論文。公共政策分野のナラティブ研究で支配的な「ポスト実証主義」のアプローチに対置する形で、ナラティブ政策枠組みの哲学的な前提と経験的研究の方法を示している。

### 1 導入<sup>1</sup> (pp.329-331)

- 2009年夏、アメリカではヘルスケア改革をめぐる「論争」が沸き上がった。
  - 「死の陪審員 (death panels)」、社会主義、ファシズムといったスローガンが盛んに論じられたが、これらのアイディアは、Obama 大統領の改革を挫くために敵対陣営が意図的に用いた政策ナラティブを構成する要素。
  - ヘルスケア改革を支持する陣営も、市民の個人的なストーリーを募り、ヘルスケア改革への支持を構築するためにナラティブの力を活用。
- ナラティブとは、劇的な瞬間やシンボル、典型的な登場人物などで満たされ、最終的にある教訓に至るようなプロットのもと展開する、時系列的な出来事を伴う物語。
  - ナラティブが人々の信念や行為を形成するうえでもつ影響力は、コミュニケーション研究やマーケティング研究、神経科学や心理学など様々な分野の研究で支持されてきた。こうした分野では、ナラティブを経験的な概念として研究し、ナラティブを説明する理論を構築するために伝統的な方法論を用いる。
- 公共政策において物語が影響力をもつことは明白だが、政策研究の大部分はナラティブの経験的研究に取り組みず、この重要なトピックを他の分野に任せてきた。
  - 物語は、公共政策研究におけるポスト実証主義的な学派の貢献の中核にある一方、実証主義はナラティブ研究の方法論的な代替案を提供することに失敗してきた。
- 本稿は、政策ナラティブ研究への量的・構造主義的 (structuralist) ・実証主義的アプローチとして、「ナラティブ政策枠組み (Narrative Policy Framework: NPF)」を導入。
  - 著者たちは、この枠組みがナラティブへのポスト実証主義的なアプローチを脅かすものではないと考えている。むしろ、ナラティブを体系的・経験的に研究すること

<sup>1</sup> 見出し番号はレジュメ作成者が割り振った。

で、物語が公共政策に及ぼす影響をめぐって実証主義とポスト実証主義がより生産的に議論できる<sup>2</sup>。

- 1990年代に、*Policy Studies Journal* のシンポジウムをはじめ、公共政策の分野では実証主義とポスト実証主義の対立をめぐる重要な議論が交わされた。
  - Weimer (1998)<sup>3</sup>は、ポスト実証主義的アプローチを評価しつつも、実証主義および量的研究の主な強みは予測にあると明言。一方 Fischer (1998)<sup>4</sup>は、大抵の「事実」は社会的な構成物であるため、質的研究が必要不可欠だと明言。
  - この論争は、政策理論 (policy theory) におけるナラティブの役割をレビューするうえで重要。なぜなら、ナラティブを理論的に重視する政策研究は、大抵がポスト実証主義の立場によるものだから。この立場の研究者は、事実の社会的構成がナラティブの検討を通じて最もよく理解できると主張。一方、実証主義的な研究者は、ナラティブに関する厳密な経験的研究が公共政策分野の外部には数多くあるため、ポスト実証主義の立場からナラティブを擁護する主張に特に反論することなく黙認。
- それから数年後の *Policy Studies Journal* のシンポジウムでは、P. Sabatier が 1999 年に出版した影響力ある書籍<sup>5</sup>からポスト実証主義が排除されているとして、Sabatier に批判が向けられた。
  - これに対し Sabatier は、科学には明確な概念、テスト可能な仮説、反証が求められるが、これらの基準に照らせば、ポスト実証主義は間違いであることを確かめられるほどの明確さに欠けている [つまり反証可能性に欠けている]<sup>6</sup>と応答。
  - 著者たちは、この論争を再燃させようとは考えておらず、ポスト実証主義による重要な貢献を否定しようとしめない。著者たちの目的は、従来支配的なポスト実証主義のアプローチに加えて、Sabatier が設定した基準を用いてナラティブを研究できる (すべき) ことを論じ、両陣営の歴史的な対立を改善することにある。

<sup>2</sup> 著者たちは注で、ポスト実証主義の研究に体系的な基準がないわけではないとして、次の文献を参照している。Lincoln, Y. and Guba, E. G., 1985, *Naturalistic Inquiry*, Beverly Hills, CA: Sage Publications. この文献の内容については社会政策/社会福祉②の第1回、第3回のレビューを参照。

<sup>3</sup> Weimer, D. L., 1998, "Policy Analysis and Evidence: A Craft Perspective," *Policy Studies Journal*, 26: 114-128.

<sup>4</sup> Fischer, F., 1998, "Beyond Empiricism: Policy Inquiry in Postpositivist Perspective," *Policy Studies Journal*, 26 (1): 129-146. 社会政策/社会福祉②の第2回のレジュメ参照。

<sup>5</sup> Sabatier, P. A., 1999, *Theories of the Policy Process: Theoretical Lenses on Public Policy*, Boulder: Westview. なお、2018年に本書の第4版が出版されているが、そこには本稿で提起されたNPFに関する章が盛り込まれており、本稿の著者2人も執筆者に名を連ねている。

<sup>6</sup> [] 内はレジュメ作成者による補足。以下同じ。

## 2 公共政策研究の哲学的基盤とナラティブ（pp.331-333）

- Sabatier を満足させうるナラティブの枠組みを導入することは、そもそもナラティブの定義が争われてきたことから、難しい試みである。
  - 構造主義的ナラティブアプローチ<sup>7</sup>（structuralist narrative approach）では、それぞれの物語にプロットや典型的なキャラクターといった一貫した識別可能な構成要素があると主張。文学理論において、構造主義はロシア・フォルマリズムやフランス構造主義を通じて発展。あらゆる構造主義的アプローチに共通するのは、多様な文脈に適用できる一般化可能なナラティブの構成要素を探ること。
  - ポスト構造主義<sup>8</sup>（poststructuralism）は、ナラティブの構造主義的な学説に対する批判から出発。人間によるナラティブの解釈が分析の単位であり、解釈の事例をそれぞれユニークなものとして捉える。その結果、一般化や予測といった構造主義の目標は、隠されたイデオロギーを暴露するためにナラティブを解体しようとするアジェンダにとって代わる。
- 文学理論に起源をもつ構造主義／ポスト構造主義の哲学的な指向性は、公共政策研究におけるナラティブの方法論にも影響を与えている。
  - 構造主義者は実証主義の方法論を信奉し、ポスト構造主義者はポスト実証主義の方法論を信奉する。
  - 公共政策研究の主流において、ナラティブ研究の圧倒的多数はポスト構造主義の伝統に基づく反面、ごく少数の研究のみが構造主義を支持する。
- 実証主義の中核的な主張は、測定可能な客観的な現実が存在するという点。
  - 体系的で透明性の高い技法を用いる、テスト可能な仮説を構築する、統計分析を行う傾向にあるといった特徴をもつ。
  - Sabatier（1999）<sup>9</sup>は、政策理論を構築するための厳密な処方箋を示すことで、公共政策研究におけるこの方法論的指向性の必要性を訴えてきた。
  - このアプローチで重要なのは、研究者が再現可能な方法論的手続きに基づく知見を提示しなければならないという点。

<sup>7</sup> 構造主義とは、一般に、Saussure の言語学を起源として、1960 年代以降に 1 つの潮流をなした思想を指す。言語学の場合、1 つの言葉が 1 つの対象と対応していると考えられるのではなく、1 つの言葉は語相互の論理的関係が作り出す差異の体系において意味を付与されると考える。このような考えに基づき、構造主義では、個々の具体的な対象を通して不変的であるような、要素あるいは要素間の差異関係からなる全体としての構造が重視される。

<sup>8</sup> ポスト構造主義とは、一般に、1960 年代後半以降にフランスで台頭し、構造主義を批判的に継承したとされる思想を指して、主にフランス外部で用いられる呼称。ここでは、構造をいかなる「外」から読むことで新しい解釈が生成するのを探ろうとする（尾関周二ほか編、2016、『哲学中辞典』知泉書館、p. 1134）。

<sup>9</sup> 脚注 5 参照。

- 公共政策におけるポスト実証主義は、実証主義への批判として登場。
  - ポスト実証主義者は少なくとも 3 つの理由から公共政策分野における実証主義的および経験的な研究を拒否<sup>10</sup>。①実証主義者が明らかにしようとする現実には、人々の主観に大きく影響されているため、政策過程などにおける規範的価値が体現する隠れたイデオロギーの観点から理解されるべき。②予測や一般化に向かう実証主義の傾向は、統計的な集計の際にミクロな文脈の重要性を無視せざるを得ない。③そのため、実証主義的・経験的な方法の使用は、マージナルな集団を不当に排除する。
  - こうした批判から、個々の研究者の解釈に大きく依拠した、帰納的で質的な事例研究を生み出す方法が目立つように。ポスト構造主義的なナラティブの技法はポスト実証主義の批判にフィットするよう見え、ポスト実証主義の傘下で文学研究から公共政策研究へと移植される。その結果、公共政策研究におけるナラティブは、ポスト実証主義的方法やポスト構造主義的な哲学的指向性と同義のものとして扱われるように。

### 3 ナラティブ研究と公共政策 (p.333-339)

- ナラティブ研究は公共政策分野においてますます重要な役割を果たしているが、その大多数が質的かつポスト構造主義的アプローチに則っている反面、量的で構造主義的なアプローチに従っているのは少数。
  - 既存研究を 2 つのカテゴリーに分類。①ポスト構造主義：ポスト実証主義の存在論・認識論を支持し、仮説のテストに反対し、帰納的で質的なデザインを固守する点の特徴。②構造主義：演繹的で、ナラティブの構造を操作化する点の特徴。また、仮説をテストし、研究の信頼性や反証を重視し、量的方法を用いる点も特徴。

#### 3-1 ポスト構造主義的ナラティブアプローチと公共政策

- この系譜は Kaplan (1986) が最初に着手したが、Hajer (1993, 1995)、Fischer (1993, 2003)、Roe (1994)、Stone (2002) などが基本的かつ模範的な研究<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> Fischer, E., 2003, *Reframing Public Policy: Discursive Politics and Deliberative Practices*, Oxford: Oxford University Press.

<sup>11</sup> Kaplan, T. J., 1986, "The Narrative Structure of Policy Analysis," *Journal of Policy Analysis and Management*, 5 (4): 761-778. Hajer, M. A., 1993, "Discourse Coalitions and the Institutionalization of Practice: The Case of Acid Rain in Britain," F. Fischer and J. Forester eds., *The Argumentative Turn*, Durham, NC: Duke University Press, 43-76. Hajer, M. A., 1995, *The Politics of Environmental Discourse: Ecological Modernization and the Policy Process*, New York: Oxford University Press. Fischer, E. and Forrester, J., 1993, *The Argumentative Turn in Policy Analysis*, Durham, NC: Duke University Press. Roe, E., 1994, *Narrative Policy Analysis: Theory and Practice*, Durham, CT: Duke University Press. Stone, D., 2002. *Policy Paradox: The Art of Political Decision Making, Revised Edition*, 3<sup>rd</sup> edn, New York: W W Norton. 脚注 10 も参照。

- これらナラティブ研究者の存在論的な指向性として、現実の重要な要素が社会的に構成されていること、公共政策の分析では事物やプロセスに意味を付与する社会的行為が重要であることを強調する。
  - ここから派生して、いずれの研究者も多かれ少なかれ、社会的に構成された世界を理解するうえで、ナラティブや物語が認識論的に特権的な位置を占めると主張。
- Fischer や Stone は、言説を通じて構成されるという公共政策の性質を真剣に受け止める、より解釈的な政策分析を提唱。
  - Stone (2002)<sup>12</sup>は、政策上の問題の定義づけが通常ナラティブの構造をもつこと、すなわち始め (beginning)・中間 (middle)・終わり (end) をもつ物語であり、英雄や悪役や犠牲者がおり、悪い勢力と善い勢力を戦わせる構造をもつと述べる。
- Fischer や Stone が公共政策における言語の重要性を描くためにナラティブを用いているのに対し、Hajer や Roe はナラティブを理論的に最も重要な要素とする。
  - 特に Roe の研究は、政策論争におけるナラティブの使用を研究するうえで最も統合された方法論を提供。
  - Roe は、カリフォルニアのサン・ホアキン溪谷における灌漑政策を事例にした Hukkinen らとの共著論文 (1990)<sup>13</sup>で初めて「ナラティブ政策分析 (Narrative Policy Analysis)」という語を使用。それぞれのインタビューで語られた物語を、「現実」を構成するより大きなナラティブの一要素として扱うと同時に、ナラティブ同士の間の内的な結合がいかにして現実を形づくるのかをネットワーク分析を通じて示した。このように Roe の研究は、現実が多くの物語によって社会的に構成されることを示すと同時に、構造主義的な特徴ももつ。
  - Roe (1994)<sup>14</sup>ではさらにナラティブの文学的な技法を公共政策の分析に適用。
    - ナラティブ政策分析は 4 つの段階を踏む。①不確実性が高く、複雑で分極化した政策分野において、始め・中間・終わりがあり、政策形成の前提を「裏書き (underwrite)」するような政策ナラティブを同定する。②支配的な政策ナラティブと同調しない別のナラティブを同定する。③2つのナラティブを比較し、政策のメタナラティブ<sup>15</sup>を導出する。④政策分析者は、新しい政策のメタナラテ

<sup>12</sup> 脚注 11 参照。

<sup>13</sup> Hukkinen, J., Roe, E. and Rochlin, G. I., 1990, "A Salt on the Land: A Narrative Analysis of the Controversy over Irrigation-Related Salinity and Toxicity in California's San Joaquin Valley," *Policy Sciences*, 23(4): 307-329.

<sup>14</sup> 脚注 11 参照。

<sup>15</sup> Roe のいうメタナラティブとは、ある問題に対する相反する政策ナラティブが同時に成り立ちうることを説明するようなナラティブである。単なる妥協点や共通項を意味するのではない。van Eeten (2007) の説明によれば、ある問題を「黒」と述べるナラティブが一方にあり、「白」と述べるナラティブが他方にある場合、そのメタナラティブは「グレー」ではなく、「黒」と「白」を同時に指し示しうる言葉、すなわち「色づくこと (coloredness)」である。このようなメタナラティブは、目下焦点

ィブが、いかにして政策問題を伝統的な政策分析のツール（ミクロ経済学、法的分析、統計学など）に適したものに再構成するかを判断する。

- Roe は、自らのナラティブ政策分析が、より伝統的で実証主義的な政策分析を行う前段階での事例研究を行う際に最適な手法だとする。
- 本稿で示す実証主義的で経験的な考え方は、Roe を例外として、ナラティブ政策分析の重要な研究者たちが目に見えて敵対してきたもの。
  - 例えば、社会科学において因果性 [の解明] は目的ではなく（Hajer 1995）、社会的アクターによって相対的であり（Stone 2002）、見つけ出すことができないもの（Fischer 2003）などと主張<sup>16</sup>。
- より近年のポスト構造主義的な研究は、いずれも政策論争における物語の重要性を理解している点で共通。特に顕著なのは [政策論争の] 基底にある前提を暴くために物語を分析する点。
  - こうした研究はいずれも理論や方法論を用いており、研究者によって明言されることは少ないが、ありうる独立変数（もしくは原因）や従属変数（もしくは結果）を引き出すことが可能。しかし、ポスト構造主義的な指向性に従っていることで、その方法論は必ずしも体系的ではなく、信頼性の分析は行われていない。また、A が B を引き起こし、さらに C を引き起こすといった直線的な因果の順序づけは、通常これらの研究の目標ではなく、反証や仮説のテストも行われない。
- 最近の論考の中には、ナラティブとポスト実証主義が同義であるといった前提から出発するものもある。
  - 著者たちは、ナラティブの研究に対して科学的な基準が適用できないという主張は、そうした基準を用いてナラティブを研究している政策研究者がいるという理由から、不正確な主張だとする。
  - ただしこのことは、ポスト構造主義の研究が無価値であることを主張しているのではない。むしろ著者たちの反論は、ナラティブがすでに科学的に研究されていることを認めようとするもの。

### 3-2 構造主義的ナラティブ研究と公共政策

- 著者たちの評価によれば、構造主義的アプローチは、ナラティブを明確に定義し、明示された仮説をテストするためにナラティブの構造や内容を操作化する場合もある演繹的なアプローチ。

---

が当てられている問題を、関係者による討議や分析や政策形成に適したものと再構成することを可能にするとされる。van Eeten, M. J., 2007, "Narrative Policy Analysis," F. Fischer and G. J. Miller, *Handbook of Public Policy Analysis: Theory, Politics, and Methods*, Routledge, 251-269.

<sup>16</sup> 脚注 11 参照。

- これらの研究の多くは定量化（quantification）の傾向があり、統計学の技法を頻繁に用いる。
- 以下、少数派でありながらも、公共政策の分析において実証主義的な基準を用いてナラティブにアプローチできることを示すいくつかの構造主義的研究を参照。
- 優れた構造主義的研究として分類されるものの多くはリスク認知に関するもの。
  - Golding ら（1992）<sup>17</sup>は、ラドンガスのリスク認知とコミュニケーション形態に関する研究において、ナラティブ形式のコミュニケーションのほうが読み手の注意を引くうえで優れていることを発見。この研究ではナラティブを他のコミュニケーション形態と構造的に区別し、ナラティブ [形式のコミュニケーション] を処置とした実験を行い、実験を再現および反証するための明確なガイドラインも提示。
- 公共政策と強く関連する様々な細分化された分野においても有望な研究が見られる。
  - コミュニケーション研究の分野では、McComas & Shanahan（1999）<sup>18</sup>が地球温暖化に関する新聞報道の内容分析を行い、物語論を Downs の「イシューへの注目の循環（issue attention cycle）」<sup>19</sup>と結びつける。3つの仮説をテストし、新聞報道の物語が循環の段階ごとに異なるナラティブの要素を強調する傾向にあることを発見。
- 他の例では、10代による抗争（teen conflict）に関する政策への含意を検討。
  - Morrill ら（2000）<sup>20</sup>は、個々の若者が抗争をどのように解釈しているかを判断するためにナラティブ分析を用いる。学生たちのナラティブを4つの構造的カテゴリーのいずれかにコーディングし、研究手続きを明記すると同時に信頼性の判断基準も報告<sup>21</sup>。その知見は、抗争についての個々の語りに耳を傾けることで、対象集団の共感が得られるような解決策を政策形成者に提供しうることを示唆。

<sup>17</sup> Golding, D., Krinsky, S. and Plough, A., 1992, "Evaluating Risk Communication: Narrative vs. Technical Presentations of Information about Radon," *Risk Analysis*, 12(1): 27-35.

<sup>18</sup> McComas, K. and Shanahan, J., 1999, "Telling Stories about Global Climate Change: Measuring the Impact of Narratives on Issue Cycles," *Communication Research*, 26(1): 30.

<sup>19</sup> イシューへの注目の循環（issue attention cycle）とは、あるイシューに注目が集まり争点化する段階から、世論が関心を失うまでのプロセスをモデル化したもの。専門家などが指摘してもあまり注目されない段階から、事件などによって世論の注目が集まり、その後は問題解決の難しさや他の競合するイシューが認知されることで関心が低くなるという段階を経るとされる。

<sup>20</sup> Morrill, C., Yalda, C., Adelman, M., Musheno, M. and Bejarano, C., 2000, "Telling Tales in School: Youth Culture and Conflict Narratives," *Law & Society Review*, 34(3): 521-565.

<sup>21</sup> 具体的には、コーディングにおける解釈の一貫性を評価するために、Lincoln & Guba（1985）が示した「監査証跡（audit trail）の作業を行い、筆頭著者2名の間でのディスカッションを通じて、個々のナラティブに印づけする際の慣行を再検討した。このディスカッションを通じて、コーエンのカッパ係数（Cohen's Kappa、観察者間の分類の一致度を測る評価指標）が 0.82（すなわちほぼ完全な一

#### 4 ナラティブ政策枠組み（pp.339-346）

- 以下では、現存のナラティブ研究を統合して、政策ナラティブの研究および理論構築に向けた量的・構造主義的・実証主義的アプローチとして NPF を提示。
  - 著者たちは、この枠組みがポスト実証主義を脅かすものとは考えておらず、ナラティブを経験的に研究することで、物語がいかにか公共政策に影響を及ぼすかについて実証主義者とポスト実証主義者がより生産的に議論できるという認識に立つと強調。

##### 4-1 ナラティブの構造を定義する

- ナラティブの構造的アプローチでは、ナラティブの構造に一般的に合意された特徴があることを示さなければならない。
  - 著者たちは、構造的な方法論に沿ったやり方でナラティブを定義し、科学的探求に適した枠組みを提供すると同時にナラティブの相対性に取り組む戦略を提供。
- 著者たちは、既存の公共政策におけるナラティブ研究に基づき、ナラティブがナラティブたりうるためには少なくとも下記の性質をもたなければならないとする。
  - 1) 設定または文脈：ナラティブは政策的な設定や文脈をもつ。例えば McBeth (2005, 2007)<sup>22</sup>は、Greater Yellowstone における環境政策の起源を探るためにナラティブを使用。設定は地理的範囲である必要はなく、政策論争における基本的前提なども設定を与える。
  - 2) プロット：ナラティブの基本的な構成要素であり、キャラクターや設定といった要素間の関係を提供し、物語のもっともらしさ（plausibility）を決定する因果的説明を構造化する。Stone (2002)<sup>23</sup>は、公共政策によく見られるプロットラインとして、衰退の物語や阻まれた進歩の物語などがあるとする。
  - 3) 登場人物：公共政策のナラティブにおける登場人物は、政策を理解するうえで重要な役割を果たすと理論化されてきた。登場人物は、英雄、悪役、犠牲者という一般的なカテゴリーのどれかに当てはまると理論化される。
  - 4) 物語の教訓：政策ナラティブにおける物語の教訓は、行動を促すものや政策的解決策として表現される。

---

致)であったことも報告されている。Lincoln と Guba の「監査証跡」については社会政策／社会福祉②の第3回のレジュメ参照。

<sup>22</sup> McBeth, M. K., Shanahan, E. A. and Jones, M. D., 2005, "The Science of Storytelling: Measuring Policy Beliefs in Greater Yellowstone," *Society & Natural Resources*, 18: 413-429. McBeth, M. K., Shanahan, E. A., Arnell, R. J. and Hathaway, P. L., 2007, "The Intersection of Narrative Policy Analysis and Policy Change Theory," *Policy Studies Journal*, 35(1): 87-108.

<sup>23</sup> 脚注 11 参照。

#### 4-2 ナラティブの内容を定義する

- NPF では、ナラティブはアクターによって相対的であるというポスト実証主義者の主張を拒否し、ナラティブは一般化可能な内容につなぎとめられ、ばらつきが抑えられなければならない。
  - 以下、一般化可能なナラティブの内容のありうる 2 つの候補を素描。
- 党派性とイデオロギー：共和党と民主党、保守とリベラルとでは異なるプロット、登場人物、因果的メカニズムを用いることから、ナラティブの内容をモデル化するときの有力候補となる。
  - 認知心理学者の Lakoff（2002）<sup>24</sup>はメタファーの影響力を理論化し、こうしたメタファーをイデオロギーや党派的な所属と結びつける。
  - Lakoff は、保守とリベラルが自らを政治的に方向づけるための「国家としての家族（Family-as-Nation）」メタファーが存在すると主張。保守には「厳格な父親の道徳規範（Strict Father Morality）」メタファーがあり、父親を絶対的な道徳的権威として、子（＝市民）は厳格なルールと不品行に対する罰を通じて善悪を学ぶという原則に基づく。リベラルには「慈しみある親（Nurturant Parent Morality）」メタファーがあり、両親が家族的な責任を共有し、子（＝市民）の従順さは相互の愛と尊敬に基礎を置くという原則に基づく。
  - 著者たちは、Lakoff の家族メタファーは国家に当てはめられることで、NPF の構成要素を操作化する可能性を示しているとする。
- 文化理論（Cultural Theory）：グリッド（grid）とグループ（group）の 2 次元で信念体系を測定する。
  - グリッドは、集団で望ましいとされる相互作用の水準を測定し、グループは、集団が個人の信念や振る舞いを制約すると予想される程度を測定。これら 2 つを軸とした 4 象限のうち最も近いものにサーベイの対象者を分類。
  - 文化理論は通常、政策的な選好などを説明するうえで、デモグラフィック特性や党派性、イデオロギーなどよりも優れているとされる。
  - 文化理論は気候変動に関する研究などで政策ナラティブを特定するために用いられてきた。文化的に固有の政策ナラティブを特定する技法はすでに整えられているため、文化理論はナラティブの内容を捉える強い拠りどころとなる。
- これらは、ナラティブを既存の理論に立脚させることで、ナラティブの相対性を回避できることを示唆している。

<sup>24</sup> Lakoff, G., 2002, *Moral Politics: How Liberals and Conservatives Think*, 2nd ed, Chicago: University of Chicago Press.

#### 4-3 分析レベル

- NPF は、ナラティブの認知とコミュニケーションを研究する 2 つのレベル＝ミクロとマクロのレベルを設定する。
- ミクロレベルでのナラティブの経験的研究は、いかにして政策ナラティブが個人および集合的な世論に影響を与えるのかに関心を寄せ、個人に対するナラティブの説得力を評価することに焦点を当てる。
  - 政策課題に対する個人の態度の変化が従属変数となりうる。方法としては実験デザインやサーベイが考えられる。
- ミクロレベルの分析では、下記のような独特の因果的メカニズムがある。
  - 規範性（canonicity）と違反（breach）：世界が予想した通りに動いていれば、自らの態度や振る舞いを変える理由は乏しい。ナラティブ論では、この正常な状態を規範性と呼ぶ。世界の見方を変化させる物語は私たちの期待を破るが、このように期待が破られることを違反と呼ぶ。物語の説得力は違反が生じる程度次第である。
    - 仮説1：あるナラティブにおける違反の度合いが高まるにつれて、そのナラティブにさらされた個人が説得される可能性は高まる。
  - ナラティブの輸送（narrative transportation）：読み手がナラティブの中に運び込まれ、その主役と関わるようになることを記述する概念。読み手が物語に「没頭」し、それによって変化や説得を受けたかを測定する 11 段階で測定する。
    - 仮説2：ナラティブの輸送が増すほど、ナラティブにさらされた個人が説得される可能性は高まる。
  - 調和と不調和：一般にナラティブ形式の情報は、人生の経験と類似した構造をしているため、個人が処理しやすい。ナラティブは個人の世界観や人生経験と調和するほど説得力をもつと理論化されている。
    - 仮説3：調和していると感じられるほど、個人はナラティブによって説得されやすくなる。
  - 語り手（情報源）への信頼と信憑性（credibility）：メッセージの説得力を構成する重要な要素として情報源の影響があることはよく知られている。
    - 仮説4：語り手の信頼が増すほど、ナラティブにさらされた個人が説得される可能性は高まる。
- NPF はメゾレベルにおいて、いかにして政策ナラティブが政策のアウトカムに影響するかに関心を寄せる。
  - McBeth ら（2007）<sup>25</sup>は、競合する 2 つの利益集団がコンフリクトの範囲を抑制・拡大するための政治的戦術としてどのようにナラティブを使用するかを経験的に検討。自らが負けていると演じるグループは現状の政策のコストを拡散させ、利益を少数

<sup>25</sup> 脚注 22 参照。

のエリートに集中させ連合を形成するためにナラティブを使用すると指摘。他方、自らが勝っているとするグループは、政策のコストを集中させ、利益を拡散させる（＝多くの人々が現場から利益を得る）ためにナラティブを使用すると指摘。

- Riker (1986)<sup>26</sup>は、「意思決定構造操作 (heresthetics)」<sup>27</sup>という語を用いて、政治的な連合を有利に再形成するために議論における価値次元を戦略的に移行させる技法に言及。政治的連合を分裂・拡大・維持するために意思決定構造操作がどのように行われるかを示した。Riker のアプローチは、政策ナラティブがエリートの連合にどのように影響を与えるのかについての研究に通じる。こうしたエリートの連合はさらに、政策変化や政策アウトカムを確実に推し進める。
  - 仮説5：ある政策的争点において自らが負けているように演じる集団や個人ほど、政治的連合の規模を拡大するために、政策の争点を広げるようにナラティブの要素を用いる。
  - 仮説6：ある政策的争点において自らが勝っているように演じる集団や個人ほど、政治的連合を維持するために、政策の争点を抑え込むようにナラティブの要素を用いる。
  - 仮説7：集団は自らの戦略的利益のために政治的連合を操作しようとして政策ナラティブを用いる。

## 5 結論

- 本稿の冒頭でヘルスケア改革の支持派と反対派がともに物語りに従事していることを指摘。本稿の枠組みは、ヘルスケア改革その他の政策課題について、ポスト構造主義的なやり方とは異なる新たな理論構築や経験的テストを呼び込むもの。
  - この枠組みによれば、共和党的ナラティブと民主党的ナラティブを識別することで、ナラティブの構造をナラティブの内容と結びつけることが可能。
  - ナラティブを特定するために、メディア報道などの内容分析といった数々の戦略を用いることが可能。
  - ミクロレベルでは、実験デザインやサーベイを用いてナラティブの説得力を測定でき、メゾレベルでは、エリートや集団のナラティブを政治的戦略の観点からいかにして連合形成を促しているかを評価できる。
  - 最終的に、ナラティブが世論を形成する影響力と、そうした世論がエリートや組織の決定に及ぼすインパクトとのつながりをテストすることも可能。ここでは、ナラティブは間違いを確かめられるほど明確なものとなりうる。

<sup>26</sup> Riker, W. H., 1986, *The Art of Political Manipulation*, New Haven, CT: Yale University Press.

<sup>27</sup> 政治的競争に勝利するために、新しい政治的な選択肢や争点を作り出すことを指しており、「選択操作」などとも訳出される。